

# 「米田町ガイドブック」



かこがわ人の会

発行 研修部会

令和6年6月7日

## 目 次

1、米田町の歴史	P 1
2、加古川橋	P 2
3、七騎塚の碑	P 3
4、日本毛織印南工場	P 5
5、宝殿駅前の道標	P 7
6、松月山福正寺	P 8
7、米田町内の西国街道	P 10
8、米田町の地名の由来	P 11
9、川西小学校の円形校舎	P 12
10、船頭の大歳神社	P 13

### 1、米田町の歴史

米田町は昭和 31 年（1956 年）印南郡米田町の内、船頭（ふなもと）、平津地区が加古川市に編入され加古川市米田町になりました。他の印南郡米田町の地区は高砂市に編入されました。

船頭（ふなもと）は明治 22 年（1889 年）までは、印南郡船頭村と言われ加古川の渡し船を仕事にしていた村と言われています。加古川は元は升田から 2 つの流れに分かれていて、船頭村はその中州にあった村です。西に流れていた加古川の跡が拓かれて造られた村ということです。船着き場があったところから「ふなもと」と呼ばれていました。行政上は「せんどう」になっています。

又、近くにある墓地の「せんど」からきたのではないかとも言われています。

平津は船頭と同様、明治 22 年（1889 年）までは印南郡平津村と言われ、鎌倉時代の平津庄からきた名前と言われています。平津庄は現在の加古川市と高砂市にまたがる荘園でした。大垣市の安楽寺にある釣鐘は、元は生石神社の釣鐘で、「応永 26 年（1419 年）播州印南郡平津庄生石推鐘」と刻まれており生石神社の辺りが、鐘が造られた時代は平津庄と呼ばれていたことがわかります。釣鐘が何故大垣市にあるのか、そんな鐘の動きにも興味をそそがれます。又、平津は宝暦の時代の地誌「播磨鑑」を著した平野庸修が住んでいた土地です。

## 2、加古川橋

一級河川・加古川を国道2号線が渡る橋で、全長660m（うち橋梁380m）の長さがあります。加古川橋西詰め少し北の土手に、大正2年（1913年）に架けられた橋の石柱が3本保存されています。

加古川に橋が架けられた歴史を「加古川市史第1巻」から見ていきたいとおもいます。

明治7年3月	木橋架橋
明治12年5月11日	流失→再建→明治14年流失
明治16年8月31日	架設→明治25年7月24日流失
明治27年3月31日	架設
明治29年以後	毎年修理
大正2年6月	本格的鉄の架橋
	この時の橋脚基盤部分が現在橋の北側に点々と残っています。
大正13年8月11日	現在の橋の元が完成
昭和34年3月	現在の姿になりました

現在加古川橋は老朽化、治水、交通渋滞緩和のため10年計画で架け替え工事が進んでいます。

## 3、七騎塚の碑

加古川橋西詰め交差点北側の堤防を一寸降りた民家の中に太子堂があり、その境内に七騎塚の碑が建っています。

七騎塚の由来は南北朝時代の正平5年（1350年）、塩冶判官高貞が冤罪により、都から出雲に逃げ帰る途中に追手の幕府軍に加古川で追いつかれ、主君の高貞を逃がすために高貞の弟、六郎重貞他郎党7人が幕府軍と戦いましたが全員が討死にしまいました。

土地の人は戦場になった所に7人の墓を建て弔いました。ところが寛延2年（1749年）加古川の氾濫により、流失してしまいました。のちに加古川宿の庄屋、中谷敬直らが文化10年（1813年）に七騎塚の碑を建立して7人を顕彰しました。これらの経緯は頼春水の書により碑の背面に書かれています。

また対岸の加古川町の称名寺には、文政3年（1820年）に建てられた七騎供養塔があります。こちらの供養塔には頼春水の子の頼山陽が建立の経緯を記しています。

七騎塚の碑、七騎供養塔を巡り昔の出来事を偲ばれてはいかがでしょうか。



#### 4、日本毛織印南工場

同社は明治 29 年（1896 年）設立、明治 32 年（1899 年）加古川工場が営業開始、大正 8 年（1919 年）に印南工場が操業を開始し長い歴史を刻んできました。国道 2 号線加古川橋を少し西に行くと、ニッケ印南工場の看板と赤レンガの塀が目に飛び込んできます。

赤レンガはイギリスから輸入されたもので、100 年を経過した赤レンガの塀、建物は今も工場の設備として活躍しています。ギザギザの鋸屋根の建物、円筒の給水塔が特に目に写ります。鋸屋根の建物は採光のため、繊維製品の点検に必要な自然の光を取り入れるため、窓をすべて北向きに設置してあります。

建物はどっしりと明治時代を伝えてくれています。

加古川工場は操業を止め現在跡地は大型ショッピングセンターや娯楽施設、スポーツ施設、市民病院に姿を変えています。印南工場は現役です。



## 5、宝殿駅前の道標

西国街道を宝殿駅前に進んで来ると、左手に自転車一時預かりの近藤商店があります。回転焼きで有名な店です。その店の前に米田町にただ一つ残っている道標が建っています。



この道標に従って進むと石の宝殿（生石神社）に行くことができます。

道標は正面中央に「左石宝殿」、右側に小さく「いしのほうでん」、左側に小さく「コレヨリ十三丁」と書かれています。道標は大きく傾いていますが50年前と同じ光景です。

高さ98cm、縦横29cmの凝灰岩製です。昔の旅人がこれを見て、「石の宝殿」を観光したことと思います。

## 6、松月山福正寺

米田町には寺が一ヶ寺あります。浄土真宗本願寺派の寺院で本尊は阿弥陀如来で、寛文4年（1644年）に創建されました。現在の本堂は元文4年（1737年）焼失したものを天明年間（1781～1789）に再建されたものです。

山門を入り左手に石棺仏があります。家型石棺の蓋石の両側を削って、地藏菩薩立像が刻まれています。竜山石製で高さ115cm、幅69cm、厚さ33cmあります。室町中期かそれ以前に造られたものと言われています。境内には家型石棺の蓋石もおかれています。この辺りに古墳があったのかも知れません。



## 7、米田町内の西国街道

江戸時代に旅人等に利用されていた西国街道が今も船頭、平津に残っています。国道2号線の加古川橋西詰めの6差路の一寸細い方の道を南側に下るとすぐ西国街道らしき道が右手にあります。左手に船頭の墓地があり100m程で国道2号線に出ます。さらに西に進み次の交差点で国道2号線から分かれ右の細い道に入ります。交差点手前右手にニッケ印南工場があり、交差点近くには今では珍しい火の見櫓があります。道は国道2号線に沿って西へ続いています。右手に末廣大明神、川西小学校左手に前島食品の工場があります。前島食品の工場の中の溝を境に高砂市になり、工場は加古川市と高砂市にまたがっています。さらに西へ行くと右手に大歳神社、妙見社、福正寺があり、43号線の高架をくぐると間もなくJR宝殿駅前です。近藤商店前の道標で米田町内の西国街道は終わります。

## 8. 米田町の地名の由来

米田町の民話が「郷土のおはなしとうた第3集」という本に6話載っています。その中の米田町の地名の由来から引用します。

大化元年(645年)、船師の藤井という人が、舟師の藤井という人が、年貢米を船で運んでいました。その時、法華山一乗寺にいた法道仙人が鉢を飛ばせて供米を申し入れました。藤井は自分だけの了見で米を渡すことはできないとことわったところ、鉢は再び空中に舞い上がり、それに続いて積み荷の米も法華山へ飛んで行ってしまいました。藤井は驚いて謝りに行きました。藤井が供米をこぼんだのは、年貢米を私物と考えなかったことが正しいのであって、怒る法道仙人のほうが無理です。法道仙人が笑って許すと、米はもとのように連なって船へ飛んで帰りました。その米俵のうちの一俵がこの地に落ちたことから、米墮(よねだ)といい、後に米田(よねだ)と呼ばれるようになりました。一俵だけこの地に米俵が落ちたのは、法道仙人が信仰している薬師如来がまつてあったので、供物してであったと言われています。その後米のとれだかもどんどん増え村は栄えていきました。

## 9. 川西小学校の円形校舎

昭和 33 年(1958 年)の開校時は円形の校舎でした。当時この辺りでは珍しい校舎でした。鉄筋コンクリート4階建、屋根はドーム型で4階は講堂、体育館、教室は1階3室、2階6室、3階5室、床面積 2500 m<sup>2</sup>の大きさでした。JRの電車からでもよく見ることができました。老朽化のため創立 50 周年を迎えた平成 20 年(2008 年)に立て替えとなりました。一部に円形校舎のなごり「銀の屋根」も再現されているのが見られます。



## 10. 船頭の大歳神社

ロックタウンの西の住宅街の中に神社はあります。道路そばの鳥居に大歳宮の扁額があり、参道を進むと広い境内になります。さらに進んで石段を上ると拝殿、本殿があります。向って右に2社、左に2社と稲荷神社が2社おまつりされています。大きな灯籠には、寛政 10 年(1798 年)、泊大明神と刻まれており船頭は泊神社の氏子と想像できます。

米田町平津にも大歳神社があります。こちらは石の宝殿生石神社の氏子です。同じ町内で氏神様が違うのは不思議で歴史を感じます。

大歳神は農業の神、穀物の神で船頭、平津とも大歳神社の作られた時代は、田園地帯であり五穀豊穡、家内安全を祈られたことでしょう。

米田町の今後のますますの発展をお祈りします。